
半熟ナルキッソス

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半熟ナルキツソス

【Nコード】

N8838I

【作者名】

久芳

【あらすじ】

夏美はクラスでナルシストといわれていた。いつも鏡で自分を見ているからだ。クラスでは浮いた存在になっているけれど、本人は特別それを気にしていなかった。そんな彼女に、同じクラスにいるもう一人のナルシスト、成沢が話しかけてくる……。

黒目がちな瞳が好き。

ふっくりとした唇が好き。

なだらかな鎖骨が好き。

胸まで伸ばした髪が好き。

しなやかな細い手首が好き。

長い指先の小さな爪が好き。

膝の上にあるほくろが好き。

あたしは綺麗。

あたしは美しい。

あたしはとても、美しい。

「ほら、ナル美、またやってるよ」

「夏美ちゃん？ あ、ほんとだ」
なつみ

手鏡を覗きこむあたしの耳に、いつもの声が聞こえてきた。

「あの子、時間さえあればいつもああやって手鏡のぞきこんでるんだよね。前、お弁当食べながら見てたときはほんとにびっくりしたけど。知ってた？」

「メイク直すのでもあんなに頻繁には見ないよね。休み時間ごとにああじゃない？ 私、夏美ちゃんがほかの子と話してるのほとんど見たことないよ」

「わたしらのことなんて興味ないんじゃない？ 自分のこと見てるのが楽しいんだろうし、ほんとナルシストだよね」

マスカラがおちていないかチェックしながら、あたしは手鏡の角度を変えてちらりと視線をやる。するとふたりは「うわ、見てるし……」と呟いたきり、話をしなくなった。

そんなに嫌なら、あたしを見なければいいだけのことなのに。

乾いた唇にリップクリームを塗り、あたしは鏡をブレザーのポケットにしまう。メイクは毎日してるけど、みんなのようにばっちりつくってはいない。自分の良いところが引き立てばそれでよかった。授業の合間の休み時間は、いつも同じことをして過ごした。

まず、顔のチェック。メイクが崩れていないか、新しいニキビができていないか確かめる。もしそこで脂浮きや、肌荒れがあったらすぐに手入れをする。ニキビも悪化させないようにすぐ薬を塗った。次に見るのは、爪。透明のマニキュアがはがれていないか、形は変じゃないか、間になにか入っていないか。歪みがあったら、すぐに直す。だからカバンにはいつも手入れの道具一式がはいっていた。最後に、髪。櫛を入れながら、枝毛ができていないか目をとおす。毎日トリートメントをしているから傷みこそないけど、髪だけはどうしても乱れやすい。中学のころから伸ばし続けている髪を丹念に梳くのはとても楽しかった。

それでもまだ時間があつたら、クリームで手や足をマッサージする。ひとりで黙々としているうちに、十分なんてあつという間にすぎた。

友達なんていらない。ああやって、人の悪口ばかり言う醜い人なんて必要ない。

あたしは綺麗でいたい。綺麗な身体を保って、綺麗な言葉だけ聞いて、綺麗なものだけ見ていたい。

だから、あんな人たち必要ない。

「……でも、うちのクラス、ナルシスト多くない？」

「多いっていうか、ふたりでしょ」

「じゅうぶん多いってば。なんにも一クラスにひとり、ナルシストいるわけじゃないしさ」

騒がしい教室の中で、やけにあの二人の声が耳に届く。これぐらの会話はいつものことだからいい。だけど気に入らない人の悪口を言って、二人で嘲笑っているときの声だけは、聞いているといつも嫌な気分になった。

「なんだよ、また俺のこと話してたのか？」

新たに加わった声に、あたしははっと顔をあげた。

「俺のことかっこいいって？ 言われなくても知ってるよ」

「そんなこと言っていないし！ほんとナル沢、ナルシスト野郎だし！」

ぎゃあぎゃああと声をあげるふたりに、彼は大きな口をあけて豪快に笑っている。手加減なく背中を叩かれて、いってえと声をあげるその姿は不思議とみんなの目を引いていた。

なりさわつよし
成沢剛志くん。通称、ナル沢。

彼はあたし同様、クラスでナルシストと言われている人だった。

正直、成沢くんのは苦手だった。

「夏美って、いつも鏡見てるよな？」

だからなるべく距離を置こうとしているのに、なぜか席はあたしの前。だから彼はことあるごとに話しかけてきて、自習の時間ともなれば勝手に机をつけてあたしのプリントをうつしはじめた。

「自分の顔ばかり見て飽きないのか？」

「……飽きない」

自習の課題を早々と終えたあたしは、また鏡をとりだして自分と向き合っていた。メイクこそ崩れていないけど、表情のチェックをしたくなったからだ。いつも正面から見ている自分の顔も、すこし角度をつければまた違って見える。それも把握しておきたかった。

右から見た顔より、左から見たほうが表情が明るく見える。歯を見せて笑うより、唇だけにしておいたほうがいいみたい。自分がより綺麗に見えるポイントを見つけたときの喜びが、あたしにとってなによりの快感だった。

そんなあたしを、成沢くんがものめずらしそうに見てくる。彼はあたしと違って、手鏡を眺める習慣はない。道行く窓ガラスや鏡で自分をチェックすることはあるけれど、気にするのはむしろ自分を見ている周りの目。学校行事でやたらカメラにアピールしたりするのはいつものことで、『俺ってカッコイイだろ』が口癖だった。

みんなはあたしも成沢くんも同じナルシストだというけれど、厳密に言えば種類が違う。だからあたしは成沢くんが苦手だった。

「なんでそんなに鏡見んの？」

「好きだから」

「自分の顔が？」

「そう」

どんなに冷たく返しても、彼は決してあきらめない。鏡を閉じて真正面に向き合い、睨むように見つめてみても、あっさりと笑い返されるだけでまったく意味がなかった。

成沢くんはたしかにかっこいいと思う。背こそそんなに高くないけれど、運動神経がいいので体育のときによく目立つ。くしゃくしゃの蓬髪が活発な動きにあわせて揺れて、ころころと変わる表情は嫌な印象なんて決して与えない。

だから成沢くんは、クラスでとても好かれていた。

「そんなに俺、かっこいい？」

「ばかじゃないの」

あたしがきつぱり言い放つと、成沢くんは肩をすくめて舌を出す。そんな愛嬌のあるしぐさをどうして自然にできるのか、思わずあたしが感心しているうちにぱっと手鏡を奪われた。

「夏美はいつも、こうやって自分のこと見てるのか」

へえ、とにやけるようにして、成沢くんが鏡の中の自分をのぞきこむ。角度を変えて観察したり、笑顔をつくってみたり、さらにはおちゃらけてポーズをとってみたりと、完全にあたしの習慣をからかっていた。

「返してよ」

「やだ」

「成沢くんには必要ないでしょ」

「まあ、な。俺はどっから見てもかっこいいし？」

鏡ごしにウインクを決められて、あたしは奪い返そうと身を乗り出す。けれど成沢くんの反射神経には敵わず、どんなに手を伸ばしてもあっさりとかわされてしまうだけだった。

「夏美。鏡の中にうつってる自分がすべてじゃないぞ？」

「なによそれ」

「鏡の中でばつちり決めてても、自分からじゃ見えないものもあるってこと。目を閉じてるときの顔は、自分じゃわからないだろ？」

「そんなの、言われなくてもわかってるわよ」

突然なにを言い出すんだろ。さっさと鏡を取り返してしまいたいけど、成沢くんにいいように遊ばれてる姿はどう見ても綺麗じゃない。あたしはじつところえて、彼が自ら返してくれるのを待つことにした。

言われなくてもわかってる。鏡で見る自分がすべてじゃなくて、むしろほんの一部なこともわかってる。自分じゃ確認できない姿がいつばいあるのもわかってる。

でも、大丈夫。あたしは綺麗で、あたしは美しいんだから。

「鏡がないと怖いんだろ？」

「いけない？」

「夏美、ほんとは自分のこと好きじゃないだろ？」

ふいに、成沢くんの表情が変わった。

「だから、いつも鏡見てるんだろ。変なところはないかって気にしてるんだろ。ごまかしてるところ、崩れてないか心配なんだろ」

いつもの飄々とした笑みが消えて、見たこともないまっすぐな瞳があたしを見つめてくる。その見透かすような視線がこわくなって、あたしは思わず唇を噛んだ。

「人になにか言われるのがこわいんだろ。だから、自分を完璧にして、なに言われても平気だって知らんぷりしたいんだろ」

唇にあとがつくと思つて、あたしはあわてて口元に手をやる。唇をかばう指先が歯に触れて、つい、爪を噛んでしまった。

かりつと、いやな音がした。見ると、爪の先がすこしだけ欠けていた。

「あ……」

あたしの顔から血の気が引いた。

あれだけ手入れていた爪が。指先が。綺麗を保っていたはずの手が、崩れてしまった。

この手は、美しくない。

成沢くんといるといけない。自分の綺麗が崩れていく。美しい自分がどんどんなくなっていくてしまう。

「夏美はナルシストって言わない。ただの臆病者だ」

「わかつてるわよ！」

震える唇から、自分でも驚くぐらい、大きな声が出た。

「いちいち言われなくても、わかつてる！」

ひるんだ隙を見て、成沢くんから手鏡を奪う。彼の顔を見ることができなくて、とっさに睨んだのはブレザーの校章だった。

「なつみ」

「うるさい！」

勢いよく立ち上がって、反動で椅子が倒れる。その派手な音に騒がしかった教室がしんとしずまりかえって、視線が集まるのを感じたけどそれどころではなかった。

爪を直さなきゃ。唇が切れてないか確かめなきゃ。綺麗でいなきゃ。成沢くんから離れなきゃ。頭がいっぱいになって、身体がぶるぶると震えだす。

「なつ……」

「ほつといてよ！」

鏡と、ポーチと、目についたものをカバンに詰め込み、あたしは教室から飛び出した。

あたしは綺麗。

あたしは美しい。

あたしはとても、美しい。

鏡を見ながら、あたしは自分にそう笑いかける。髪を伸ばして落ち着いた雰囲気になっているので、ほんのすこし口角と目じりを動かして、しつとりとした微笑みを浮かべるのが一番似合っていた。

あたしがとつさに逃げ込んだのは、立ち入り禁止の屋上へと続く階段だった。

そこへ走っていく姿は誰にも見られなかったようで、授業が終わっても休み時間が終わっても次の授業が始まって、あたしを心配して追ってくる人は誰一人としていなかった。そもそもここは中学ではなく高校なのだから、授業に出るのも出ないのも個人の責任だ。「……やっちゃった」

屋上への扉に背中をあずけて、呟く声は狭い踊り場の中で反響する。あたしの足元には、鏡や爪切りやマニキュアや、崩れたところを直す道具で散らかっていた。

爪と、手と、唇と顔を確認して、それでようやく落ち着いた。脱力して、あたしはこの場から一步も動けぬまま、昼休みをむかえようとしていた。

あたしはただの、コンプレックスのかたまりだった。

中学校のはじめの一年間。さんざんいじめられていたのはもう過去のこと。あれこれ言われたのも過去のこと。二年生のクラス替えから生活は戻ったはずなのに、その一年の生活で、あたしはすっか

り自分の容姿が嫌いになってしまっていた。

だからそれを、すこしでもましにしようと必死で磨いた。良いところはできうる限り引き立てるようにした。まだ整形をすることなんてできないから、自分のできる範囲で、とにかく美しくなれるように努力した。

『夏美ちゃん、爪ちっちゃくて可愛いね』

そんなあたしに、新しいクラスの子がかけてくれた声がとても嬉しかった。自分が密かに努力していることを、認めてもらえたのが嬉しかった。

『夏美ちゃんって、まつげ長いんだね』

『夏美の使ってるヘアピン、かわいいね。どこで買ったの？』

『夏美ちゃんって髪まっすぐだからうらやましいな』

褒めてもらえたところはとことん伸ばした。逆に、嘲笑われたところは必死で隠した。一年のころのクラスメイトと廊下で会っても視線を感じたけど知らん顔ですれ違った。

あたしの陰口を言う人がいても、聞こえないふりをして、あとになつて言われたところを直した。磨きあげたところはなんと言われなくても無視した。

見た目のことだけじゃなくて、勉強だつて躍起になって取り組んだ。あれこれ言ってくる人たちよりも悪い成績にはなりたくなかった。猛勉強のおかげで、あたしの入学した高校に、同じ中学の生徒はほとんどいなかった。

高校でまた、同じ目にはあいたくなかった。だから自分磨きは怠らなかつたし、成績だつて落とさなかつた。

『夏美ちゃんって肌綺麗だよね』

『夏美はいつも成績いいよな』

そう言ってもらうことだけがすべてだった。

どこか変なところはないか。またなにか言われるんじゃないか。いつもそればかりが気になって、どうしても鏡を手放すことができない。

そしていつしか、ナルシストと言われるようになっていた。

あたしは、ナルシストなんかじゃない。

ナルシストは、自分のことが好きな人だ。自分が大好きで、自分を愛していて、自分を抱きしめたいと思う人たちのことだ。

あたしは違う。自分のことなんてこれっぽっちも好きじゃない。抱きしめたくもないし顔も見たくもない。

夏美はナルシストって言わない。

成沢くんはそれに気づいていた。

彼なら一目でわかつたんだと思う。あたしが頻繁に鏡を見る理由も、爪の手入ればかりする理由も、自己陶醉のためじゃない。自分の醜いところを、必死に隠すためのことだと。

教室に戻らなきゃ。そう自分に言い聞かせても、あたしはどうしてもこの場から動けずにいた。動こうとしてもおしりがぴつたりと床にはりつき、立ち上がることもさえできなかった。

膝が震えている。それを抱く手も震えている。がたがたと震える衣擦れや、かちかちと鳴る歯の音が聞こえる。それはまぎれもなく自分のもので、止めようと思っても身体はいうことを聞かなかつた。顔は大丈夫。身体は大丈夫。どこも変なところなんてないから、なにも言われたりしない。わかつているのだけど、教室を飛び出し

たときのあの視線をどうしても忘れることができなかった。

取り乱すなんてみっともない。いつも静かで冷静で、落ち着いて
いる子でいたかった。

大声で笑うような、品のないことはしたくなかった。人を見てげ
らげらと嘲笑う人にだけはなりたくなかった。

笑われる人にも、後ろ指を指される人にもなりたくなかった。

教室に戻るでも、帰るでも、とにかくこの場から動かなきゃいけ
ない。でも、身体がついてこない。震える膝と懸命に戦っているう
ちに、誰かが階段を上る足音が聞こえてきた。

隠れることも、逃げることもできない。あたしは呆然と、誰も来
ないはずの場所に來た彼を見上げた。

「……成沢くん」

彼は、ばりばりと気まずそうに頭をかいた。

「あやまらないからな」

そうぶつきらぼうに言つて、成沢くんはあたしの隣にどかつと座
りこんだ。

彼が來た驚きで震えこそとまったけど、あたしはいぜん、身動き
をとることができなかった。肘と肘がぶつかるぐらい近い距離にい
る成沢くんは、自然と身体がこわばる。まともに顔を見ることがで
きなくて、あたしは膝に顔をうずめた。

「なによ、笑いに來たの？」

「違うって」

「授業はどうしたのよ、探しに來たの？」

「もう昼休み。夏美を探してたわけじゃなくて、ここ、俺の憩いの
場なの」

そのわりに、どうしてお弁当と一緒に購買のパンをたくさん抱え
てきたんだらう。たしかに成沢くんがよく食べるのは知っていたけ

ど、むりやり手に握らされたメロンパンとコーヒ―牛乳はあたしのために買ってきたのだとしか思えなかった。

「ここ、静かでいいだろ。人が来ることもめったにないしな」

「……うん」

「とりあえず、顔あげたら？ そんなことしたらよけい化粧落ちるぞ？」

成沢くんの指摘に、あたしははつと顔をあげる。顔にかかる髪を手ぐしで直してくれたのは彼だった。

あぐらをかいた膝の上にお弁当を広げて、成沢くんはミートボールをつつく。本当にただご飯を食べにきただけなのかと、あたしは呆然とその横顔を眺めた。

不思議と、彼が隣にすることが嫌じゃなくなっていた。成沢くんの顔を見た瞬間、身体ふるえがとまったのは確かなことで、スカートのプリーツが乱れようと中が見えそうになっというのと、自分がとてもひどい顔をしているであろうことを見られても、必死に取り繕うとは思わなかった。

「……あやまらないからな」

もう一度、成沢くんが言う。視線はお弁当に落としたまま、口調もぶっきらぼうで、その姿はいつも教室で見る彼の姿とは違うものだった。

「べつに……」

もらったコーヒー牛乳のパックにストローをさしながら、あたしは呟く。唇がつんととがっついていて、まるで子供のようだと思ったけど、自分ではうまく直すことができなかった。

一口飲んで、その苦さと甘さに、こわばっていた身体がほぐれていくのを感じる。ほっと一息ついたあたしを見て、成沢くんがそっと笑った。

その笑みですら、いつもと違う。あたしと目があっても、おちゃらけたりしない。俺ってかっこいいだろ、とも言わない。苦手だな、と思う彼の姿は今、ここになかった。

「……あたし、ナルシストじゃないよ」

「知ってる」

言って、成沢くんは箸を置いた。

「俺も、ナルシストじゃないし」

「うそだ」

「ほんとだよ」

たっぷり、三秒は見つめあったと思う。

「夏美と一緒になんだ」

ややあつてから、成沢くんがそう笑った。

笑ったというべきか、息をついたというべきか。唇こそ微笑んでいるけど、その眉根は寄ってしわが刻まれている。苦笑にも似た、今にも泣き出しそうな、弱々しい表情だった。

「ほんと、自分のこと、あまり好きじゃない。自信なんてないし、かっこいいとも思っていない」

「でも、俺はかっこいいって、いつも言ってるじゃない」

「夏美の鏡と一緒にだよ」

背中をどっぷりと扉にあずけ、彼は天井を仰ぐ。のけぞった喉が

たくましいけど、吐き出す声はかすれて聞き取りづらい。

「俺ってかっこいいだろ、って言って。それでいつも『調子乗るな』って言われるけどさ、でも嫌われてはいないだろ？ ……なんだろうな、人に好かれてるかどうかを確かめたいんだよ」

鼻の頭をかきながら、成沢くんがすこし言いよどむ。すると踊り場はしんと静まり返って、お互いの息づかいしか聞こえなくなる。下の階ではいつもどおりみんながいるはずなのに、その気配が階段を上ってくることはなかった。

「人に好かれる自分はさ、自分でも好きだと思えるんだ。だから、人に好かれてるのを確かめたくて、いつもああやってるだけ」

「……うそ」

「ほんとだってば。まわりが勝手にナルシストだって言うだけだ」
夏美と一緒にだと、その言葉を繰り返して、成沢くんがあたしの頭を撫でた。

「だから、夏美を見ると、もう一人の自分を見てるような気分になるんだよね……」

大きな手を頭に乗せられて、あたしはほっと落ち着く自分がいることに気づく。長い髪を上から下へと伝う指先に、不思議と、心地よさのようなものまで感じていた。

「人の目がこわくて、なにか言われるのがこわくてびくびくして、自分を隠そうと必死になってさ。友達なんていらない、一人でも大丈夫だって自分に言い聞かせて、本当はひとりが怖くてたまらないくせに」

「ずばり、凶星だった。」

「前の俺もさ、そんな感じだったんだよね。夏美のこと、全部わかるわけじゃないけど、それでもわかるものがあつたから放っておけなかったんだよ」

「放っておいてくれればいいのに」

「ほんとに夏美は、いじっぱりだな」

「いいじゃない別に」

「ほんととはかまってほしいくせに」

「成沢くんってほんと自意識過剰だね」

「知ってる。だから、夏美には助けが必要だなんて思ったんだよ」
「やっぱり、成沢くんにはなんでもお見通しだった。あたしはもう
なにも言えなくなつて、泣き出しそうなのを気づかれないようにま
た顔をうずめて隠すことしかできなかった。」

「日に日にひどくなつてくの、見てたからさ。そのうち自爆してつ
ぶれるんじゃないかって、ひやひやしてた」

「だから、自習のときに言つたのだと。あたしの頭を撫で続けなが
ら、彼は言う。」

「自分のこと、好きになれないけどさ。それでも自分を磨いて綺麗
に見せようとか、そういう行動に出るっていうことはさ。夏美の心
の根っこは、まだ自分のことが好きなんだって、俺は思うんだよな」
「違う？」と訊かれても、あたしはこたえることができなかった。

「成沢くんも特別それに答えが欲しかったわけではないようで、すこ
しあたしの様子をうかがい、また口を開く。」

「夏美は自分を守ろうとしてるだけ。俺も守ろうとしてるし、それ
はみんなやつてること。ただ人それぞれ方法が違っただけでさ、それ
を見てどう思つかも人それぞれなんだよ」

end

成沢くんに言わせれば、あのふたりだって、自分を守るためにあやつて人を見て笑っているらしい。

「……あのふたりはさ、俺も最初ちょっと苦手だったんだよ。でも、あれがあいつらなりのアピールでさ。ほんとは、夏美と仲良くなりたいつて思ってるんだって」

「うそ」

「うそじゃない。俺、夏美の話してるの聞いたことあるけど、それこそ夏美が綺麗にしてるのとかすごいうらやましがってたぞ？」

ああやっぱり、あたしは陰でいろいろ言われている。そう思うと、よけい気が滅入ってうなだれてしまう。

「……夏美が、ふたりの言葉に敏感になるってことはさ。それだけ、ふたりのことが気になるからだろ？ 一回喋ってみるよ」

「いやよ。ひとの陰口ばかり言って、綺麗じゃないもの」

「だから、あれがふたりなりの愛情表現なんだってば」

「そんなの知りたくない」

目に見える綺麗だけでいい。耳に聞こえる綺麗だけでいい。深く入り込まなければならぬ綺麗は、あたしにはいらなかった。

違う。

「だって、こわいもの」

あたしはただ、逃げているだけだった。

ほんとうの自分を見せて、それを知った人たちがまた、昔のようにあたしを嘲笑ってきたら。それを考えるととてもこわくなって、お互い深く関わらないようにと距離をおくようになっていた。

結局あたしは、中学の頃からちつとも成長していなかった。

「……あたし、もう教室に戻れないよ」

「戻ってこい」

「こわいの。じろじろ見られるのとか、絶対、嫌。なに言われるか

わかんない」

「いいから、戻ってこい」

ぐしゃぐしゃと乱暴に髪を乱して、成沢くんは手を離した。

「みんな、心配してたから。笑ってたやつなんていないから。追いかけようか迷ってたやつも、いたから」

「でも、こなかったもの」

「それは夏美がみんなに壁はってるから。みんな、壁はられてることに気づいてるから、気になってもなかなか近づけないんだよ。女子でも男子でも、夏美のこと気になってるやつらたくさんいるぞ？」
クラスの人々には、あたしから距離をおいていた。結局みんな、あたしがいなくなると陰口を言うと思っていたから。あたしからおいている距離を自ら縮めようとしてくる奇特な人なんて、成沢くんぐらいだった。

「俺、こうやって夏美の中身と話せて、嬉しいけどなあ。たぶんみんなだって、話してみたいと思ってるだろうし」

「でも……」

「でもじゃなくて、実際やってみようぜ？　ここでうだうだしてたって、なにもはじまらないし答えも出ないしさ」

ほんと、彼があたしの膝を叩いた。

「夏美だって、そうやって壁はってる自分に疲れてるんだろ？　全部崩せとは言わないからさ、ちょっとだけ空気穴あけてみるよ」

「……やりかた、わかんないし」

「笑ってみろ、なにも考えずにこつと。化粧で綺麗にするより、表情ひとつ変えるほうが全然いいぞ？　笑顔は誰でも綺麗に見えるし、その効果は俺が一番知ってるからさ」

立ち上がり、成沢くんはおしりについたほこりをぱんぱんと払う。そしておもむろにあたしを振り向き、手を差し出した。

「行こうぜ。そろそろ予鈴鳴るぞ？」

「でも……」

ためらうあたしの顔を、成沢くんが両手で包み込む。なにをされ

るかと思つたら、そのままぐにやぐにやと頬を揉みくちやにされた。こりかたまつた表情筋をほぐすように、成沢くんはあたしの口角をひっぱる。頬を伝つた涙の残りも、触れた時点で気づいていると思う。あたしが抵抗すると、彼はあつさりと手を離してくれた。

そして、手首をつかんで立ちあがらせる。まったく動けなかったのが嘘のように、あたしはあつさりと立ちあがることができた。

「……こわいよ」

「俺だつて毎日こわいさ」

あつけらかと、成沢くんが言う。くしゃりと笑つて、また頭を撫でてくれる。

そのぬくもりに、自然と、あたしの口から笑みがこぼれ落ちた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838i/>

半熟ナルキッソス

2010年10月8日15時25分発行